

不思議な鐘（クリスマスの鐘）

登場人物

おじいさん ペドロ（兄） アントニオ（弟） 女の人（おばさん）
ささげものをささげた人たち（王様（王冠） 金持ち（黄金） 小説家（本）等）

<ふしぎなかね>

昔々、遠い国のある町に、大きな教会が立っていました。日曜日になると、町の人たちはみんな、この教会に出かけました。

教会の中には、大きなオルガンがあって、その音は、遠くまでよく聞こえました。

この教会の高い高い塔の中に、クリスマスの鐘というのがありました。

世界中で一番美しい音で鳴る鐘なのだそうですが、誰もこの鐘の音を聞いたことがありませんでした。この鐘は、クリスマス・イブによいささげものをしたとき、神様が鳴らして下さると言われておりました。

さて、この町からずーと離れた所に、小さな村があって、そこに2人の仲の良い兄弟が住んでいました。お兄ちゃんの名前はペドロ。弟の名前はアントニオと言いました。

ペドロ「ねえ、おじいちゃん、どんな教会なの」

おじいさん「それはそれは大きな教会でね。日曜日には沢山の人たちがやってくるし、大きなオルガンに合わせて讃美歌を歌うときなんぞ、もう胸がわくわくしてな。」

アントニオ「おじいちゃん、ボクも行ってみたいよ。ね、ペドロにいちゃん」

ペドロ「そうだな、アントニオ。行ってみたいな。ねえ、おじいちゃん、行ってもいい？」

おじいさん「もっと大きくなってからだ」

2人は、おじいさんからこの大きな教会の話聞くたびに、一度でいいからその教会に、それもクリスマス・イブの礼拝に出てみたくてたまりませんでした。

その年もクリスマス・イブがやってきました。おじいさんに黙って行くのはよくないと思いましたが、ペドロとアントニオは、思い切っておじいさんに内緒で出かけることにしました。その日は、雪が降っていて、とっても寒い日でした。

アントニオ「おにいちゃん、その教会はものすぐきれいなんだってね」

ペドロ「アントニオ、そうだって。今から胸がドキドキしちゃうよ」

アントニオ「でも、おにいちゃん、ささげものがないよ」

ペドロ「大丈夫だ。少しずつためたお小遣いがあるんだ。ぼくたちにはこれが精一杯だ。

それよりアントニオ、寒くないか」

冷たい風に吹かれて、長い道を歩くのは、とてもつらいことでした。2人は手をしっかりとつないで、一生懸命に歩きました。

やがて、町のあかりが見えて、もうじき町の門です。

その時、2人は、雪道の上に、何か黒いものあるのに気が付きました。

アントニオ「おにいちゃん、あれ、あれはなあに？ 人、人じゃない？」

ペドロ「まさか、こんな雪の中に……」

ペドロ「アントニオ、女の人だよ。ちょっと手を貸して」
アントニオ「あっ、もう冷たいよ」
ペドロ「いや、大丈夫だ。暖めればいいんだ」
アントニオ「おばさん！ おばさん！」
ペドロ「おばさん！ ねむっちゃだめだ！」
アントニオ「おばさん！ 起きて！ 起きてよ！」
ペドロもアントニオも、一生懸命になって、おばさんの体をゆすったり、さすったりしました。

アントニオ「おにいちゃん、教会の礼拝がもう始まるよ」
ペドロ「うん、わかってる」
ペドロはしばらく考えていましたが、やっと弟に言いました。
ペドロ「アントニオ、お前一人で教会に行ってくれないか。この人をおいて行くわけにはいかないよ。なんとか目をさまさせて、ボクのポケットのパンを食べさせようと思うんだ」
アントニオ「いやだよ！ 僕一人だけで行くのはいやだ」
ペドロ「そんなことを言っていたら、二人ともクリスマス・イブの礼拝に出られないじゃないか」

ペドロは、ポケットの中から銀貨を取り出して、
ペドロ「アントニオ、これを持って行くんだ。教会の祭壇の所に、誰にも見られないように、そうっとこれを置くんだ。これは僕たちのささげものなんだ。さあ、早く行っといで。戻ってくるとき、誰かを連れて来ておくて。一緒に行けなくてごめんよ」
アントニオはうなずいて、一人で教会の方に急いで歩き出しました。

教会に向かって歩いて行くアントニオの姿を見ているうちに、ペドロの目から涙がこぼれて来ました。あれ程出たかったクリスマスのお祝い、折角ここまで来たのに、一人で冷たい暗闇の中に残ることになってしまったのです。

さて、この年のクリスマス・イブの礼拝は、本当に素晴らしいものでした。今までで一番明るく、きれいだと、みんなが口々に言っているのを、アントニオは聞きました。アントニオは、目を丸くして、教会の中を見回しました。
こんなに大きくて、立派な教会は初めてだったし、オルガンに合わせて、みんなが歌い始めると、町の外にまで響き渡るようでした。

牧師先生のお話が終わると、大勢の人たちが祭壇の前に列をつくりました。ささげものをするためです。

お金持ちは、素晴らしい宝石を持ってきました。ほかの人は、黄金をかごにいっぱい持ってきた人もありました。小説家は、自分の書いた本をささげました。

王様は、自分の冠をとってささげました。そうすればクリスマスの鐘を鳴らすことができると考えたからです。

ほかの人たちも、これまでになかった立派なささげものを見て、きっと鐘は鳴るにちがいないと思いました。

でも... 聞こえるのは、冷たい風の音だけでした。

今年もまた、あの鐘は鳴らなかった...。みんなが心の中で思っていました。

ささげものの行列が終わって、聖歌隊が最後の讃美歌を歌い始めたときです。オルガンを弾いていた人が手を止めました。

みんなの目が祭壇のわきにいる牧師を見つめました。牧師は手をあげて「静かにッ！」という合図をしました。

教会の中は、誰もいないかのように静かになりました。

かすかに、本当にかすかに、けれどもはっきりと、高い高い塔の上から、鐘の音が響いてきました。鐘の音は、だんだんと大きく、美しく、遠くまで響いて行きました。

やがてみんなは夢からさめたように立ち上がり、祭壇の方に目を向けました。

そこには、一人の小さな男の子がしゃがんでいました。アントニオです。アントニオが、お兄さんからわたされた銀貨（一枚）をささげていたのです。

（おわり）

なぜ鐘は鳴ったのか？

ささげものをすると鳴る鐘 「不思議な鐘」

高価な物をささげても鐘は鳴らない。（金額が問題ではない） なぜ鳴ったのか？

アントニオ（弟）がささげた銀貨一枚によって鐘は鳴った。（量より質（心））

（一生懸命働いてかせいで貯めたお小遣い全部 心のこもった献げ物？）

おばさんを助けたペドロ（兄）の行為？

<やもめの献金>

マルコ 12:41-44 イエスは賽銭箱の向かいに座って、群衆がそれに金を入れる様子を見ておられた。大勢の金持ちがたくさん入れていた。12:42 ところが、一人の貧しいやもめが来て、レプトン銅貨二枚、すなわち一クアドランスを入れた。12:43 イエスは、弟子たちを呼び寄せて言われた。「はっきり言うておく。この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。12:44 皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。」

（量より質（心） - 物の価値は見かけではない！）

<施しをするときには>

マタイ 6:1 「見てもらおうとして、人の前で善行をしないように注意しなさい。さもないと、あなたがたの天の父のもとで報いをいただけないことになる。6:2 だから、あなたは施しをするときには、偽善者たちが人からほめられようと会堂や街角でするように、自分の前でラッパを吹き鳴らしてはならない。はっきりあなたがたに言うておく。彼らは既に報いを受けている。6:3 施しをするときは、右の手のすることを左の手に知らせてはならない。6:4 あなたの施しを人目につかせないためである。そうすれば、隠れたことを見ておられる父が、あなたに報いてくださる。」

<天に宝を積みなさい>

マタイ 6:19 「あなたがたは地上に富(宝)を積んではならない。そこでは、虫が食ったり、さび付いたりするし、また、盗人が忍び込んで盗み出したりする。6:20 富(宝)は、天に積みなさい。そこでは、虫が食うことも、さび付くこともなく、また、盗人が忍び込むことも盗み出すこともない。

ささげものをすると鳴る鐘(不思議な鐘)

ささげもの 誰にささげるのか 神にささげる 神が喜ぶ
神が鐘を鳴らして下さる
神が喜ぶこととは?
おばさんを助けたペドロ(兄)

<最も重要な掟>

マタイ 22:34 ファリサイ派の人々は、イエスがサドカイ派の人々を言い込められたと聞いて、一緒に集まった。22:35 そのうちの一人、律法の専門家が、イエスを試そうとして尋ねた。22:36 「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」22:37 イエスは言われた。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』
22:38 これが最も重要な第一の掟である。22:39 第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』 22:40 律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」

<「善いサマリヤ人」のたとえ> (教科書 P.61)

ルカ 10:25 すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」 10:26 イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、 10:27 彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」 10:28 イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」

10:29 しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。

10:30 イエスはお答えになった。

「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。 10:31 ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。 10:32 同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。 10:33 ところが、旅をしていたあるサマリヤ人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、 10:34 近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。 10:35 そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』

10:36 さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」 10:37 律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言

われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

ペドロ(兄)は、女の人(おばさん)の隣り人になった!

< 神は愛 >

1ヨハネ 4:7 愛する者たち、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。4:8 愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。4:9 神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。4:10 わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。4:11 愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。4:12 いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内ですべて全うされているのです。4:13 神はわたしたちに、御自分の霊を分け与えてくださいました。このことから、わたしたちが神の内にとどまり、神もわたしたちの内にとどまってくださることが分かります。4:14 わたしたちはまた、御父が御子を世の救い主として遣わされたことを見、またそのことを証ししています。4:15 イエスが神の子であることを公に言い表す人はだれでも、神がその人の内にとどまってくださり、その人も神の内にとどまります。4:16 わたしたちは、わたしたちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます。4:17 こうして、愛がわたしたちの内ですべて全うされているので、裁きの日に確信を持つことができます。この世でわたしたちも、イエスのようであるからです。4:18 愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出します。なぜなら、恐れは罰を伴い、恐れる者には愛が全うされていないからです。4:19 わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。4:20 「神を愛している」と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。4:21 神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです。これが、神から受けた掟です。(1ヨハネ 4:7-21)